幼童教育と童謡（4）

葛原　齒

D、順序を意識さするに役立つ童謡

何節かに分れてゐる童謡で、その第一節が何であり、第二節が何であるかは、自ら、順序が決つてゐなくてはなりませぬ。既述のものゝ中にも、實は、それが有つたのですが、改めて、この點について、心して、世の多くの童謡を檢討して、幼兒へ提供したいと思ひます。

即ち、前々月の「夕やけ小やけ」の如き、それであります。自らなる順序があるのでした。

——烏も歸るから、私も歸ろ——
からすがなくからかへろ

でありました。「小さな鯉」（「鯉と麩」）もさうでありました。

○

それと同じく、次の「シャボン玉」も、まづ、ふくれて、管の先で、クル〳〵と廻り廻り、更に〳〵ふくれるのです。それで、

あんまりふくれて破れるな

なのです。ところで、「シャボン玉」遊びの次のプロセスは、管の先から、シャボンが離れて、宙に浮いて、フワフワと飛んで行く事です。空に上つてゆく事です。空高く、キラ〳〵光つて、空へ〳〵、です。そこで

あんまり上つて破れるな

なのです。

かうした物の順序は、おのづからなるものでありますが、時に、その順序を紊るものがあつて、幼兒に知らぬ中に、その不自然を、感じさせて居るものもあることを恐れます。

シャボン玉　　梁田貞氏曲

一、ふくれる〳〵　シャボン玉
　フウ〳〵吹けば　クル〳〵こ
　まはつて　ふくれる　管の先
　あんまり　ふくれて　破れるな

二、あがるよ〳〵　シャボン玉
　フワ〳〵　ゆれて　キラ〳〵こ
　ひかつて　上るよ　空たかく
　あんまり　あがつて　破れるな

（「大正幼年唱歌」第二集）

次のも、同じです。幼稚園なり、小學校なりに、まづ、登園し、登校するのです。

「今朝も　はよから　ニコ〳〵こ
　皆そろつて　うれしいな」

なのです。そして、室内の

花瓶のお花

が目についたので、それで、

「花瓶の　お花も　お早う　お早う」

なのです。次に、ベルがなつて、おけいこが始まるのです。ですから、

「今に　はじまる　おけいこは
　皆　大好き　うれしいな」

なのです。それで、室の中から、外を見ること、お庭の何かの木や、また、實は、お砂場のほこりにも、雀が、下りて來てゐるのです。雀は、いぢめられない事を、よく知つてゐて、早く來て、砂いぢりをしてゐるお子さんの仲間入もしてゐる氣で傍でチュン、チュンこと、朗らかに囀つてゐるのです。その雀言葉が人間に通じないばかりに、雀と人間との交渉が、そこでストップしてゐることは、ほんとに口惜しいですね。さて、そこで

「お庭の雀も、お早う　お早う」

なのです。

お早うの歌　　弘田龍太郎氏曲

お早う　お早う
先生　お早う　皆さん　お早う
今朝の　はよから　ニコ〳〵こ
皆そろつて　うれしいな

お早う　お早う
花瓶のお花も　お早う　お早う
お早う　お早う
先生　お早う　皆さん　お早う
今に　はじまる　おけいこは
皆　大好き　うれしいな
お早う　お早う
お庭の雀も　お早う　お早う

（「幼年童謡集」第一集）

○

雀といへば、雀の童謡の多い中に、今では、時候外れになりましたが、雪ごけ時の雀があります。これは、實は、雀に、

ごこでも遊べて　うれしいね

といふのではなくて、自らに、

ごこでも遊べて　うれしいわ

なのです。それは別として、まづ、人間に近いところの

屋根の雪

を出して、それから、遠くして

道の雪

を出したのです。また、

第一節は、とけたね

であり、

第二節は、とけたよ

である事も、偶然ではないのです。特に心して、さうしたのです。「ね」には、對照と距離があり、「よ」は、すぐ手を握り合つてゐるのです。そして、前述のとほり、雀に話して悅ぶ心は、我自らの悅ぶ心を他へ話してゐるのです。

宮城道雄氏曲

チュンチュン雀

チュンチュン雀よ　うれしいね
雪がとけたね　屋根の雪
とけたね　きえたね　軒の雪
ごこでも遊べて　うれしいね
チュンチュン雀よ　うれしいね
雪がとけたよ　道の雪
とけたよ　きえたよ　庭の雪

ごこでも遊べて　うれしいね

（「箏曲童謡」第三集）

同じ雀ので、次の『すゞめ』は、まづ、あちらの屋根の雀を見つけたのは、遠きより始まつた觀がありますが、實は、おのれの瞼毛は見えないのと同じです。我がをる窓の上の屋根は、我には見えなくて、向ふの屋根、あちらの屋根ばかり、我には見えるのです。それで、まづ、

「あちら　の　やねで——」

なのです。そして、それは、小さな口を、口の割合に、パッ、パッと、大きく、開いて——さうです、開くといふ文字通りに、六十度にも近いかと思はれるほど廣く開くのが、一聲毎に、目につく程、正に開いて、鳴くのです。一生懸命に鳴いてゐるのです。それで、その聲を聞いてゐると、その雀でない、他の雀の聲も聞えるのです。それが何處で鳴いてゐるのか、中々、分らなかつたのですが、それは、自分に近い、

「こちら　の　やねで——」

鳴いてゐるのです。そこでいはゞ、野球の見物に行つて、偶然、ついたスタンドの方のチームに聲援する氣になる樣に、こちらの屋根の雀に聲援して

「まげずに　なくよ」

なのです。

すゞめ　　小松耕輔氏曲

一、あちらの　やねで、
　チュン〳〵〳〵〳〵なくよ
　口をば　あけて　元氣よく
　チュン〳〵　チュ〳〵〳〵〳〵チュン
　さへづるよ

二、こちらの　やねで
　チュン〳〵〳〵〳〵なくよ
　まけずに　なくよ　元氣よく
　チュン〳〵　チュ〳〵〳〵〳〵チュン
　さへづるよ

（「大正少年唱歌」第一集）

○

右の雀と、似た形式をとつた敍述法によるものに、次の

「林檎と子供」があります。

八百屋の前を通つた子供が、その店先に並んでゐる林檎を見た時の心持です。自分の事は、後にして、まづ、對照の方を、はやく氣づいたのです。

「林檎の子供が外見てる」

と氣がついたのです。さて、氣がついてみると、自分達も、その林檎と同じく、逆に、

「林檎を皆が見てこほる」

なのでした。

この二つの對照は、本來は、まづ、自分達が先に、林檎を見たのです。しかし、自分の事は自分には分りにくゝて、まづ、對者の描寫に始まつたのです。

しかも、どちらも、

「赤い頰つぺを　並べて　並べて
　圓いお顔を　並べて　並べて」

であります。これは、作曲者の、輕井澤の別莊に遊んだ先年の夏の作です。そこで「ほつぺ」といふ幼兒語を、入れる事を、互に、悅んだのでした。

林檎と子供　　弘田龍太郎氏曲

八百屋のお店で　外見てる
林檎の子供が　外見てる
　赤い頰つぺを　並べて　並べて
　圓いお顔を　並べて　並べて
八百屋のお店を　見てこほる
林檎を　皆が　見てこほる
　赤い頰つぺを　並べて　並べて
　圓いお顔を　並べて　並べて

（「幼年童謠集」第三輯）

○

噴水は、まづ、
　ひつきりなしに　水柱が
　高く上つて　おもしろい

のです。ですから、第一節は、おのづから

「シュウ　シュウ　シュウ　シュウ」

です。そして、面白いから見てゐる中に、

「風にふかれて　霧の雨――」

がこぶのですが、それは、目に見えるより早く、見てゐるものゝ顔に、霧の雨が、降りかゝつて、

あゝ　すゞしい

こいふ順序です。ですから、

「サラ　サラ　サラ　サラ」

が、おのづから、第二節にあります。その順序を、こゝり違へる事は、ありません。

シュウ　シュウ　シュウ　シュウ

顔に　あたつて——

は大變です。實は、霧の雨ですから

顔に　降りかゝつて——

こいひたい所ですけれど。

噴　水　　梁田　貞氏曲

一、お池の噴水　おもしろい
　ひつきりなしに　水柱
　　シュウ、シュウ、シュウ、シュウ
　高く上つて　おもしろい

二、お池の噴水　すゞしいな
　風に吹かれて　霧の雨
　　サラ　サラ　サラリ
　顔にあたつて　すゞしいな

（「大正幼年唱歌」第一集）

○

最近のでない小學國語讀本の卷一に、兄さんが繪をかいてをり、姉さんが字をかいてゐるレスンがあります。それは、尋常一年のですが、小學一年でなくても幼稚園の幼兒でも、姉や兄の眞似がしたくて、カバンをかけたり、ランドセルを脊負ひたくなり、おべんたうをこしらへて貰つてブラ〳〵下げて家の内を歩き廻つて、椽側に來て、朝食後、間もないのに、たべたがつたりするものです。

同じ樣に、兄さんや姉さんの勉强の傍に來て、半ば羨ましげに、半ば珍らしさうに、見てゐるのです。私も、幼時、兄の英語の字引を、手にさつて、小さな〳〵插繪を見ては、兄に聞き聞きして、うるさがられた事があります。

この童謠などは、讀本の、あの插繪を大きくかいて、彩色も施したりして、それを示しながら、唱はせる事に、愉

快は、倍加する事を信じます。

梁田　貞氏曲

一、繪をかく兄さん　お上手ね
　字をかく姉さん　お上手ね
　　その繪は何の繪
　その字は何といふ字

二、ほう〳〵帆柱　立ちました
　ほう〳〵白帆が　つきました
　　兄さん　その繪は　お船でせう
　　兄さん　ほんとに　いゝ船ね

三、姉さん　上のは山の字ね
　姉さん　下のは川の字ね
　　おや〳〵　お山の樣な　山の字ね
　　おや〳〵　川の樣な　川の字ね

（「昭和幼年唱歌」第三集）

E、敬虚な心を表はせる童謠

○

日本精神の、國體觀念の、精神作興のと、成人教育には、結構ですが、私は、一面、幼兒から、日曜學校に親しましめるキリスト教の、さては、近年、佛教の施設を感心してゐます。長者を敬するといふ事は、幼兒から、理窟抜きに、養はなくてはならないことであり、一生を支配する宗教心の芽生も、幼時からこそと思ひます。しかも、近代の科學は、とかく、それから、凡ての人を遠ざけしめることを、何としませうや。

茲に、次の一篇は、他にも、いろ〳〵の役目を果してくれてゐる童謠ですが、こゝでは、

「お手々　パチ〳〵　拜みませう」

と、やり、賑やかであり、ついで、

「お手々　合せて　拜みませう」

と、極めて、靜かであることに、意義を認めたいのです。そして、小松宮城兩氏が、別々に作曲して、何れも、宗教的香氣を深くこめられた事に滿足してをります。

小松耕輔氏曲
宮城道雄氏曲

お宮とお寺
　お宮に　何が　ありますか
　石の段々　大鳥居

御手洗水　狛犬　お注連縄
お手々　パチパチ　拜みませう
お寺に　何が　ありますか
大きい　お屋根の御本堂
四本柱の　鐘つき堂
お手々　合せて　拜みませう

（「箏曲童謠」第七集）
（「昭和少年唱歌」第一集）

○

近年、こかくの問題が續出して、東京でも宗教系統の學校などに、不敬こまで進まなくても、軍事教官が、連袂辭任したなどの不祥事件さへありましたが、私共、外國語を、邦譯する時は、人稱代名詞に、階級が無かつたり、動詞そのものに、日本語ほどの複雜味がなくて、他の副詞か、副詞句の力を借らなくては、

仰せられました

などの崇敬體の表現が全うされないので、まことに、困りますし、また、よく、殊に、女學校の英語時間に、

「父がいつた」、「母がいつた」

こなら、まだしもですが、

「お父樣が、いつた」、「お母樣が……」

と譯する少女のある時は、聲を大にして、

「一寸、待つて——」

をかけて、「誰が——」と反問して、

「お父樣が、いはれました」

「お母樣が、おつしやいました」

と直さす事の面倒を重ねてをります。甚しいのに、なりますと、

「王樣が、行きました。彼は——」

と、平氣で譯してをり、多くの先生も、それで、フルマークを與へる。

"The King went, and he……"

の譯語であるのでせう。それは、やがて、必要な時には

「天皇陛下がいらつしやいました。陛下は……」

と譯させたいからであります。

私は、殊更に、「忠君の思想が、日本中の學校の教室で、

外國語邦譯の用語からも、案られさうな」と、ひどく、神經を痛めてをります。それごころではありません。

「ベルギーの天子が登山して、岩から落ちて、

死んだつてサ。」

といふ會話をきいて、ぞつとした其の時電車内の私でした。

かくて、私共は、昭和八年十二月二十三日の皇太子殿下御誕生を、總出で、おもひ〳〵に、いろ〳〵の歌を作つて、御祝ひ申上げたと同じく、忠君愛國の思想を、幼兒にも、植ゑつけたく、その方面の童謠もと、今更のやうに、作らうとしてゐます。

次の一篇は、十數年昔のものですが、此の理想の前驅をなすものとして、私は、大事にしてをります。

近年の御鹵簿は、多く自動車になりましたが、先般、秩父宮殿下が、御名代として白耳義の陛下の御葬儀遙拜式に御參列の時は、御馬車でありました。私は、受持の兒童と共に學校の門前に整列して、拜して、殊に、久々に、正裝の近衛騎兵の、勇ましさ、又、美しさに打たれて、まことに、有難い事でした。(この第二節の、終りが、

みんな　そろつて　勇しや

近衛騎兵は　美しや

と、誤まり歌はれてゐる事は、いつかも、何かで、申しておきました)。

近衛騎兵　　外山國彦氏曲

一、皆　大きな馬に乘り

お馬車の　後さき　護衛する

バカ〳〵〳〵〳〵

バカ〳〵〳〵〳〵

みんな　そろつて勇しや

近衛騎兵は　勇しや

二、皆　右手に持つ槍の

三角旗は　赤に白

ヒラ〳〵〳〵〳〵

ヒラ〳〵〳〵〳〵

みんな　そろつて美しや

近衛騎兵は　美しや

この他に、私は、

「二重橋外の楠公さん」

を、今、作りかけてゐます。先年、畏くも拜謁を許されました時、

澄宮殿下の御頬のほゝくろを、『ほうくろ大將』といふ童謠にし、又、幾首もの和歌にもして、自ら記念にしておきましたのが、國民新聞に掲げられ、畏くも、皇太后陛下のお眼に止りまして、ほゝゑませたまうたと洩れ承はりまして、恐懼にたへませんが、義は君臣情は父子、それはやがて、直宮樣方へもの、臣下の情、私達は他に、奉公の誠意のさゝげ樣もありませうなれども、まづ、歌謠つくりは、正義のために、至誠をつくして、この方面の作謠にも勵まなくてはなりませぬことゝ信じてをる次第であります。

次は『歌はせない童謠の活用』

（「大風小風」より）

スキートピー身上相談

幼稚園の皆々樣、私は、菊池フジノ樣のスキートピーでございます。去年の秋の小春日に、こゝ幼稚園の畠に蒔かれたものでございます。その時、御主人フジノ樣は、「私はいろんな花を交ぜないつもり、スキートピーで私の畠を飾らと思ふの、綠の葉がぎつしり茂つて、勢のいゝつるがクルクルッとのびて、ピンク、紫、純白の花が一ぱい咲いて：：：」と、かうおつしやいました。お隣の御主人さんが「イマジチーション、スキートピー」だなんて、私の事を雜誌にお書きになつた時、今に訂正だよりで、あつと云はせると憤慨なさいましたつけ。私共も、一同咲揃つて、他の五の畠を睥睨する時を想像して見て、嬉しさで身内がぞくゝゝとしたものでした。

ところがまあ、どうしたら宜しいでせう、聞いて下さいませ。春は三月になつて、四月もすぎて、さて愈〻五月になつて、黄水仙は咲き、チウリップは咲き、そら豆も咲いてしまひました、一番憎らしいのは、從妹の蔬どう豆が、隣で、さつさと咲いてしまつて、實までなつたぢやありませんか。それだのに、私共一同揃ひも揃つて二寸ばかり出たつきり、伸びも縮みもしませんの。生れては見たけれど：：：つて、いふわけでございます。肥しは下さる、霜よけはして下さつたのですが、どうしたのでございませう、同じに植えられた及川樣のは、ようく肥つて、もうぢき咲きそうなんでございますよ。比べて見ながらきつと是は陽あたりが惡かつたかも知れないとフジノ樣はおつしやるのですが、如何なものでせう、おてんとう樣が、私共の所ばかりよけてお廻りになるつて事もございますまいれ。

かうやつて兎に角折角地上へ出て參つたのですが是から先、どうしたら宜しいでございませうか、幼稚園の先生方は賢い方ばかりだと承つて居りますので、恥をしのんで御相談申上げます。方法なり、妙薬なり何卒御教へ下さいませ。お願ひ申上げます。